

スキー倶楽部創設までの道のり

秋田スキークラブ会長 川辺 金光

1. はじめに

秋田スキークラブの発足日は、秋田スキー倶楽部として規約制定がなされた 1926 年(大正 15 年)11 月 15 日である。しかし、実質的な倶楽部の活動は 1913 年(大正 2 年)より行われていた。このことは、当時の時代背景からして驚愕に値する。

さて、秋田スキークラブ年表の最初に「永井道明によるスキー」、「レルヒ少佐のスキー」が載っている。実は、この 2 行から秋田スキー倶楽部の発足までを記した数行の記録は、倶楽部の誕生と発展に夢をはせ、スキーへ情熱を傾けた先人の方々の想いが凝縮している歳月と言える。しかしながら、現在のクラブ会員でこの間の事情を知る人は少なく、クラブ誕生の経緯も知らない人が多いように思う。

そこで、さらなる発展を期するため、スキー倶楽部の礎となったスキー倶楽部創設までの道のりと、その後のスキー倶楽部の普及活動の一部についてエピソードを交え紹介する。

2. 秋田スキー倶楽部誕生まで

2.1 日本のスキーの夜明け

1911 年(明治 44 年)1 月 12 日の新潟高田市、歩兵第 58 連隊の営庭では、一人の外国人が「メトレ・スキー (スキーを履け)」、「オテレ・スキー (スキーを外せ)」の号令を整列する連隊長以下の 14 名の青年将校に下した。しかし、将校達は戸惑うばかりで、全員が目の中の二本の長物と長い一本の樫竿がどんな代物か皆目検討がつかなかった。そして、号令をかけた人物こそが日本で最初にスキーを指導したとされるオーストリアの軍人レルヒ少佐である。日本へのスキー伝来はこの日とされ、スキー発祥の地を高田市とする由縁はここにある。やがて、レルヒは厳格にスキー指導にあたり、平地歩行、回転、停止などを伝授し、本格的な山岳スキー・ツアーが行えるまでに将校達のスキー術を高めた。こうした一連のスキー訓練を見、高田の第 13 師団長 長岡外史はある思いを心に秘めた。そして、氏の決断こそが新潟のみならず東北のスキー普及に大きな影響を与え、秋田スキー倶楽部誕生のきっかけへと繋がるのである。長岡外史は、冬季の陸上戦闘でのスキーの有効性を研究していた。しかし、レルヒ少佐の訓練の様子からスキーが軍事的目的のみならず、民間人の冬季の遊具、体育向上のために利用できると考え、民間人を対象にしたスキー講習会を執行し大成功を収めたのである。講師はレルヒ少佐以下、あの青年将校達であった。後に、長岡は天皇陛下にこの内容を報告している。

こうした、13 師団内のスキー訓練を弘前の陸軍第 8 師団長が視察していた。そして、視察後、翌年の冬季には管轄の連隊からこの訓練に参加させることを決意したのである。

2.2 秋田でのスキーの始まり

実は、レルヒ少佐が始めて号令を掛けた 10 日前、すなわち、1910 年(明治 43 年)12 月の末、秋田市の櫓山運動公園（場所については諸説あり）には、両足につけるべき長物と手に携えるべき二本の細木の用具を自由に操れずにいる集団があった。この用具は、高等師範学校教授の永井道明が持参したものであり、永井氏は秋田市出身の東京女子師範学校 井口アグリの要請により 6 日間に渡り最新の体育講話を行うため東京から招かれていたのであった。永井氏は「これは、スキー。こっちは杖。自分が留学していたスウェーデンでは冬季の外運動として老若男女が楽しくスキーをしている」と紹介した。その中に、秋田スキー倶楽部の創設に大きな影響を与え、倶楽部の創立時には顧問となった秋田中学教諭（後に秋田鉱山専門学校教官） 山口竜輔氏がいた。永井氏の秋田での滞在期間は短く、講話が主目的であったことから、関係者に強い印象を与えながら二本杖のスキーは永井の講話行程に合わせ山形へと消えた。この内容を記したのがクラブ年表の 1 行目である。もしも、永井氏の目的が冬季のスキー運動の講話に限定され、滞在が長期であったなら本県のみならず日本のスキーの歴史が変わっていたのかもしれない。

さて、前年にレルヒ少佐のスキー訓練を視察していた弘前 8 師団長は、早々に秋田市の歩兵第 17 連隊から村野誠一中尉を選出し専修員として高田へ派遣することを決めた。この年の高田でのスキー訓練は、村野らの軍関係者の他に民間人も含め三週間に渡り行われた。担当講師はレルヒ少佐と先の青年将校があたりスキー操作の他にスキー行軍、距離競技も実施された。

高田でのスキー訓練から帰秋した村野中尉は、第 13 師団で使用した一本杖のスキー術を同連隊の将校に伝達した。その後、秋田県知事兼教育長 森 正隆は秋田県主催の学校、電燈、営林署関係者を対象にしたスキー講習会を決定し参加を呼びかけた。会期は 1912 年(明治 45)年 2 月 13 日～28 日までの 15 日間で村野中尉らの軍関係者が講師を務めた。この呼びかけに、先の山口竜輔氏、旭北小の煤賀儀八郎氏ら全県から参加者が集まった。なお、会期中の 17 日には村野中尉、山口、煤賀氏を含む有志による太平山頂上を目指したスキー行軍が行われていた。その行軍は結果的に雪不足と雨に阻まれ山頂へ至ることは出来なかったが、新聞には参加者の意気込みへの賛辞が書かれている。なお、この講習会で優秀であった山口、煤賀の両氏は、この後に行われた高田でのスキー講習会へ秋田の代表として何度も派遣されることになった。

1 回目の高田でのスキー講習会へ派遣され秋田へ戻った山口、煤賀の両氏は、1913 年(大正 2 年)1 月 11 日～20 日より金昭寺山にて秋田市および周辺の学校関係者を中心とする 70 名の民間人を対象にしたスキー講習会を行った。また、有志による五城目の森山に登山を決行している。頂上付近では相当の苦労があったものの、下りのスキーの快適さに皆が満足した。クラブ年表の 2 行目はこの出来事を記したものである。

2.3 秋田スキー倶楽部の誕生

秋田市では山口竜輔氏らの努力により、スキーが冬季の遊具、学校体育として有効であることが認識され、当初当時の名士と呼ばれた一部の人々の興味の対象から庶民の間にも広がる機運が生まれた。同時に、秋田スキー倶楽部の前身であるスキー倶楽部が生まれ、信越スキー倶楽部秋田支部の設立を記念して、倶楽部主催のスキー大会が金照寺山で開催された。以後、県内一円でスキー講習会やスキー大会が開催されるようになり、同時にスキーの愛好者は増え続けた。秋田スキー倶楽部では、1919年(大正8年)1月に寒風山でスキー講習を行い、1925年(大正14年)2月には、県知事を含む県首脳を招いての倶楽部主催の寒風山スキー大会を挙行了。また、1926年(大正15年)2月には、手形山を会場にした第1回全県スキー大会が倶楽部の会員の方々の献身的な努力で成功させたのである。こうした活動や倶楽部の会員数は年々増加したことから、円滑な倶楽部運営を行うための規約の制定や、会長を始めとする役員を決める必要性が出てきた。特に山口竜輔、新巻広政、武藤鉄城、下山富士夫、大橋重吉、那小屋定雄、安土武比古の各氏は精力的に倶楽部の将来を見据え規約や運営方針を練り上げたのである。そして、1926年(大正15年)11月15日に新巻広政氏を初代会長とする我が「秋田スキー倶楽部」が誕生したのである。高田のレルヒ少佐のスキーから約15年の月日が流れていた。発足時、山口竜輔氏は「自分は年だから、今後は若い貴方たちが率先してスキーの普及に当たらねばならない。」と語ったと那小屋氏は回顧している。また、創立した倶楽部の全員の方々は倶楽部が50年、100年と繁栄することを夢見たに違いない。

3. あとがき

スキークラブ年表の僅か数行の中に、ここに記した大きなドラマがあったことを我々は忘れてはならないであろう。そして新星「秋田スキークラブ」とすべく努力することを心に刻もうではないか。

最後に、今回の原稿は80周年寄稿および「秋田のスキーその昔」と言うドキュメンタリー番組に基づくものである。先人の方々がスキーにかけた情熱と努力に改めて敬意を表し終わりとする。